

28PA-pm067

化粧品による肌トラブルとその要因に関する研究

○芥川 陽美¹, 黒崎 麻由¹, 高石 雅樹¹, 浅野 哲¹ (国際医福大薬)

【目的】近年、化粧品の使用による肌トラブルを訴える人が増加し、消費者センターの調査では、2011年および2012年の商品・役務別危害発生件数で化粧品が1位に位置している。そこで本研究では、化粧品の使用による肌トラブルについて、各種化粧品、個人の肌質および肌状態との関連性を解析し、対策を検討した。

【方法】化粧品の使用者数が多いと予想される本学の学生を対象とし、アンケート調査を行い、化粧品の使用状況や肌トラブルの経験率、各個人の持つ肌質やアレルギー性疾患との関連等を解析し、対策を考察した。

・アンケート配布時期：2014年9月（回収率65.77% 661人/1005人）

【結果および考察】化粧品による肌トラブルの経験を持つ学生は全体の約3分の1であった。男女別では、男子が約10%、女子が約50%と女子の方が高かった。原因である化粧品の種類として多かったのは、順に化粧水、ファンデーション、洗顔料であった。また、回答者による自己申告で肌質を4つに分けたとき、化粧品による肌トラブル経験率が最も高い肌質は混合肌で約50%、脂性肌と乾燥肌で約30%、最も低かった肌質は普通肌で約15%であった。さらに、自身の肌が敏感だと感じている人では、敏感だと感じていない人よりも、化粧品による肌トラブル経験率が約8倍高かった。以上のことから、化粧品使用による肌トラブルには、化粧品の種類といった外的要因と、肌質や肌の状態などの内的要因の両方が関与していることが示唆された。化粧品による肌トラブルを予防するためには、個人の肌質および肌状態をしっかりと理解し、それに合った化粧品を選ぶことが必要であると考えられる。また、アレルギー素因を有する人では肌トラブルが出やすい結果が得られ、現在疾患の種類との関連について解析中である。